



# 綱渡り

6月15日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

フランケンシュタイン・モンスターのことはもう話したろうか。

正確に言うとフランケンシュタイン氏は小説の中の架空の人物だし、ぼくはフランケンシュタイン氏ではないので、ぼくが現実につくったクリーチャーをフランケンシュタイン・モンスターと呼ぶのはおかしいかもしれないのだが、でもまあ世間一般に、ああいう風にしてつくられた人造人間はフランケンシュタイン・モンスターと呼んで差し支えないだろう。いや。仮に差し支えがあったとしてどうだと言うのだ？ モンスターは実在してしまったのだし、呼び名を変えたからと言っていなくなるわけでもない。

ぼくがフランケンシュタイン・モンスターを作ったのは、実を言うとちょっとした事故からで、決して神をも恐れぬ創造主をめざしたわけではない。オリジナルのフランケンシュタイン・モンスターは墓場から掘り起こした人間の遺体を切った貼ったしてつくられるのだが、ぼくがそんな恐ろしいことをするわけがない。ぼくはただ、果物をたくさん集めて並べてただけだ。アルチンボルドという画家の絵で、果物を並べて人の顔みたいに見せるだまし絵があるのだけれど、その全身版をつくってやろうと試みていたのだ。

言い忘れていたけど、ぼくは目下、締切り迫る卒業制作作品に取り組んでいる美大生だ。ああ。わかっているとも。もちろん果物を並べて人間に見せるなんてのは独創性に溢れた作品からは程遠い。パクリと呼ぶことすら恥ずかしい、模写レベルのお遊びに過ぎない。そんなことはよくわかっている。でも何にも手をつけないままに時間ばかりがたってしまって、提出期限が迫り来る中でできることなんて限られている。とにかく形にすることが最優先なのだ。それがどんな思いつきであっても。

何はともあれそんな訳でぼくは果物を並べていた。実際にやってみると分かるが、これは思いの外に時間をとられる作業だ。顔のパーツだけで、驚いたことにざっと百個は必要だった。アルチンボルドは正面から描くだけだが、ぼくは立体にしなくてはならないので恐ろしくたくさんの果物を使うことになった。出費だって馬鹿にならない。それに果物の場合、季節柄手に入らない物も多い。この場所にミカンを置きたいと思ってもミカンは手に入る時期と手に入らない時期がある。

そんな具合にして首を作り、胸部を作り、両腕をそれぞれ指先まで作る頃には、ぼくは日々の食事にすら困るようになっていた。目の前には大量の食べものがあるのに、なにしろ卒業制作作品だ、食べてしまう訳にはいかない。空腹に目が回りそうになりながら腹部を作り、背中を作り、臀部を作り、ペニスを作り、大腿部を作り、膝頭を作り、すねとふくらはぎを作り、アキレス腱を作り、足の甲とかかとと足の裏と足指を作った。食べてはいけない果物の香りに打ちのめさ

れて、一通り完成するとその工房を逃げ出した。

アトリエの隣の部屋で空きっ腹を抱えてすることもなく、ぼくはひっくり返って眠ってしまった。目を覚ました時、部屋は真っ暗で、一瞬自分がどこにいるのかわからなかった。最初に気づいたのは圧倒的な果物の香りだった。せっかく隣室に逃げ出したのに、むせ返るような果物の香りはぼくに迫って来ていた。ぼくはゆっくり身を起こした。遠くでごろごろという雷鳴が聞こえた。しばらく暗闇で目を凝らしていると、天窗のあるアトリエの方から稲光らしきちらつきがかすかに見えて、また遠くでごろごろ言うのが聞こえた。

電気をつけようと思って立ち上がった瞬間、すぐ近くに雷が落ちたのだろう。あたりがひどく明るくなり、ほぼ同時に大音響で破裂するような轟音が響き渡った。けれど本当にぼくを驚かせたのは稲光でも雷鳴でもなかった。ぼくのすぐ目の前に聳える巨大な人影に腰を抜かしそうになった。ほんの1メートルほど先に〈それ〉は立っていた。稲光が消えると同時に再び真っ暗になってしまったが、手を伸ばせば届くほどのところに、いや、向こうが手を伸ばせばぼくを捕まえられるくらいのところに〈それ〉がいることはわかった。

果物の香りが迫って来たのも道理だ。迫ってきたのは香りだけではなかった。本人がすぐそばまで迫って来ていたのだから。どうして果物の塊が立ち上がったのか。どうして果物の塊に過ぎない物が隣の部屋からここまでやってきたのか。そしてぼくのすぐそばまで迫ってどうしようというのか。体長2メートル近くあるモンスターと戦って勝ち目があるだろうか？ いやいや。パーツを取り上げてみれば一つ一つは果物に過ぎないのだ。いざとなったら食べちゃえば何とかなるかもしれない。

「いやもう、どうもこうもあきまへんわ」

誰かが大阪弁ですぐそばでしゃべった。誰だ？ そうか。どうしてそれを思い付かなかったんだ！ イタズラだ。これは誰かが動かして持って来たんだ！ ばかばかしい。それ以外に何がある？ 誰かがぼくの寝ているのをいいことに、イタズラをしようというのでモンスターを立ち上がらせ、寝ているぼくのすぐそばに立たせたのだ。寝覚めのぼくを驚かせるという目的なら、悔しいが見事に果たしたと言えるだろう。

「どないもこないも、歩きにくうてしゃあないで」

「びっくりするじゃないか」

「あ。やっぱし起きてはりました？」

「誰だよお前」

「誰て」

その瞬間、またしても稲光があたりを照らし出し、果物の顔がぼくのすぐ前に突き出され、そ

の口が動くのが、ほんの一瞬だが、見えた。

「まだ名無しですわ。あんたはんが名前をつけてくれはらへんから」

ぼくは息が止まりそうになり、気がついたらさっきまで寝ていたソファに倒れ込んでいた。足も腰も力が入らなくて、ぼくの両脚は床の上をむなしくかき回していた。

「ちょ！ 勘弁してえな」

闇の中でモンスターの声が出た。いまはうっすらとその輪郭が見えるようになっている。巨大なモンスターは長い両腕をそっと前に突き出し、どうやらぼくを探しているようだ。ぼくは居場所を悟られまいと息を止めてその様子を見つめていた。

「なあ、あんた。いま腰抜かしたやろ。そりゃないで。あんまりやで。誰が作ったんやっちゅうねん。作ったあんたが腰抜かしてたら、わたの立場あらへんがな」

言われてみれば確かにそうだ。ぼくにさえ疎ましがられたら、まさしくフランケンシュタイン・モンスターになってしまう。ちょっと気の毒に思ってぼくは口を開いた。

「どうやって立ち上がった？」

「どうやって？」しばしの間。「こう、上体を起こして、ほんでから右脚をこうやって」

「そうじゃなくて、どうやって命を得た？」

「むずかしこと聞きまん。ほな、あんたはんはどうやって命を得たんや？」

モンスターと哲学論争をする気はない。ぼくは言い方を変えてみた。

「いつから動けるようになった？」

「いつからて、わた、まだ時計もよう読まんのに」

「そうなのか」

「それに。歩くのかて精一杯や。あんたと一緒やで」

「ぼくと一緒？ 何が」

「あんたはんも試験とか卒業制作とかギリギリのところやでやってまっしゃろ？ わても同じや。ギリギリで歩いてまんねん」

「歩きにくいのか」

「せやからあんたと一緒やて。一瞬一瞬が綱渡りや」

次の瞬間、またしても稲光が部屋の中を照らし出し、両腕を左右に広げてバランスを取ろうと悪戦苦闘しているモンスターの姿が見えた。と、次の瞬間。再び闇に沈んだ部屋の中でバラバラと音がした。何の音に一番近いかというと、たくさんの果物を床にばらまいた時の物音だった。そういうわけでモンスターが綱渡りに失敗すると同時に、ぼくの卒業制作作品は消え失せてしまい、ぼくもまた綱渡りに失敗してしまった。もっともそんな話をしても教師陣は誰も信じてくれない。だからせめてここに書き留めておこう。ひょんなことからぼくがフランケンシュタイン・モンスターを作ってしまったいきさつを。

(「綱渡り」 ordered by sachiwoflanagan-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 新作スタート。お題募集中。

---

2011年10月1日。

Sudden Fiction Projectの新作発表が始まりました。

1日1篇ペースをめざしていますが、これはどうなるかわかりません。  
毎日、その日のお題を見て、いきなり書き始めていきなり書き終わる。  
即興的に書くSudden Fictionをこれからお楽しみください。

お題募集中です。

「[急募！お題](#)」のコメント欄で受け付けています。  
どなたでも気軽にご注文ください。初めての人、大歓迎です。

(お題の管理上、TwitterやFacebookでは見逃しがちなので、  
どうか上記コメント欄をご利用ください)

それではこれからしばらく新作のシーズンをお楽しみください。

※発表済みの作品をご覧になりたい方は  
「[SFPインデックス \(ただいま作成中\)](#)」  
をご活用ください。

◇ 綱渡り

<http://p.booklog.jp/book/42598>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42598>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42598>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.